

第72回日本薬理学会年会

橋爪裕子*, 安孫子保**

第72回日本薬理学会年会は菅野盛夫先生（北海道大・医・細胞薬理）を会長として、平成11年3月22日から25日までの4日間にわたって、まだ雪の残る札幌にて開催された。

本学会において、特別講演4題、会長講演1題、教育講演5題、学術奨励賞受賞講演3題、シンポジウム19題、そして一般演題として口演で334題、ポスターで699題が発表された。

特別講演において、中村祐輔先生（東京大・医学研・ヒトゲノム解析センター）は、「ヒトゲノム計画と21世紀の医療」という演題で、2003年までに終了するとされるヒトゲノム解析によって期待される、疾患の原因解明とそれとともなう新しい薬物の開発や治療方法について展望された。岡本宏先生（東北大・医・医学生物化学）は「サイクリックADPリボース-Ca²⁺シグナルシステム：その分子機構と医学・生物学上の意義」という演題で、膵臓のβ-細胞におけるインシュリン分泌に関与するサイクリックADPリボースによって細胞内Ca²⁺動態を制御する分子機構について説明され、さらにサイクリックADPリボース-Ca²⁺シグナルシステムが、心筋や神経細胞などにおいても重要な情報伝達系である可能性を示唆された。また廣川信隆先生（東京大・院・医・分子細胞生物学）は、「細胞内物質輸送の分子機構：新しいモーター分子群KIFsの分子細胞生物学」という演題で、神経細胞における細胞内物質輸送モーターとして新しく発見されたキネシンについて、分子生物学的手法から明らかにされたその構造と機能を解説された。さらに眞崎知生先生（国立循環器病センター）は、近年大きく発展をとげ

たエンドセリン研究について「血管機能におけるエンドセリンの多様な作用」という演題で、血管の内圧調節や血管リモデリングに関与するエンドセリンの最新の知見をまとめられた。

菅野盛夫先生はその会長講演において、「もう一つの血管内皮由来弛緩因子—EDHF」と題されて、生理的な状態でもまた血管内皮が損傷されて一酸化窒素（NO）依存性の血管弛緩が障害されたような病的状態においても、EDHFがNOによる血管弛緩作用をバックアップする重要な血管弛緩因子であることを指摘された。

教育講演では、渡邊和夫先生（千葉大・薬・薬効・安全性）「実験胃潰瘍と胃酸分泌の薬理の新しい展開」、大塚栄子先生（北海道大・院・薬・薬効）「新しいRNA酵素の設計とメッセンジャーRNAの特異的切断」、唐木英明先生（東京大・院・農学生命・獣医薬理）「情報伝達とカルシウム」、相澤慎一先生（熊本大・遺伝発生医学研・形態発生）「頭部形態形成の分子機構」、谷口直之先生（大阪大・医・生化学）「糖鎖遺伝子による細胞のリモデリング：ガン転移抑制と異種移植医療へのアプローチ」が講演されて、いずれの会場においてもそのホットな内容に、多くの聴衆が熱心に聞き入っていた。

学術奨励賞は杉本幸彦先生（京都大・院・薬・生体情報制御）の「E型およびF型プロスタグランジン受容体の生理機能解析」、松野浩之先生（岐阜大・医・薬理）の「血小板膜糖蛋白受容体（インテグリン機構）の薬理的意義：血管狭窄の制御及び生体内新規抗血小板作用物質の同定」、森下竜一先生（大阪大・院・医・遺伝子治療、大阪大・院・医・加齢医）の「新しい薬物療法としての核酸医薬：転写因子EF2及びNFκBをターゲットとしたデコイ療法の開発」の3題が選ばれ

*旭川医科大学薬理学

**北都保健福祉専門学校

て、それぞれ受賞講演を行った。

シンポジウム19題は、ここでは全部を紹介できないが、「遺伝子改変動物の薬理学的研究への応用と今後の展望」「創薬研究の新機軸」「創薬ターゲット分子の新しい探索法」など、21世紀に中心になるであろう遺伝子解析を基礎とした、新しい薬理学研究と創薬の方向性を示唆するテーマが多かったように思われる。さらに間近に迫った高齢化社会に対応するテーマ2題「老年薬理学研究の動向と将来への展望」「高齢化社会で増加する歯周病の治療に対する分子薬理学的アプローチ」もとりあげられた。

また口演とポスターあわせて1000題以上になった一般演題では、情報伝達、受容体、消化管、免疫・炎症、内分泌、外分泌、鎮痛/依存、行動薬理、神経伝達物質、神経薬理、記憶・学習、神経化学、平滑筋、血管内皮、NO、血管平滑筋、心機能、血圧/循環、分子薬理、アポトーシス、チャネル、腎臓、骨・歯、統計学などの各セッションに分かれて発表され、熱心な討論が行われていた。ポスターは終日展示されており、演題番号の奇数

と偶数に分かれて、それぞれ1時間の質疑応答時間がとられたが、十分広くスペースのとられたポスター会場であるのにも関わらず、肩がぶつかり合うほどの盛況であった。一般演題においても、分子生物学的アプローチを駆使した演題ならびに遺伝子とその発現に関する演題が増加し、薬理学の分野でも大きな変革の時期にきていることを実感した。本学会のプログラム表紙に、菅野先生自ら描かれた絵の中の「シマフクロウ」と「DNA鎖と転写機構」はまさに象徴的であり、知恵の女神ミネルヴァ（ギリシャ名ではアテナ）の使者であるフクロウが、正しく適切な遺伝子レベルでの研究を導き、有効でかつ安全性が高く、患者の生命・生活の質を向上させる医薬品が開発されるよう期待したい。

最後に、本学会では日本薬理学会では初めて学会期間中に託児施設が設けられ、大変好評であったことを付け加えて記したい。今後多くの学術集会において、小さな子供を持つ女性研究者が参加しやすい環境が実現してほしい。